

北杜夫とドイツ

南 森 孚

I はじめに

北杜夫（本名・斎藤宗吉 1927～）は、随筆集『人間とマンボウ』（1976）に収録した「芥川龍之介と私」（1967）の中で、文学作品との出会いについて「私は中学時代、文学作品をちっとも読まなかったが、高校となると仲間がいろいろな本を読むので、私も闇雲に読みはじめた¹」と回想している。北杜夫がドイツ語、そしてドイツの小説家トーマス・マン（Thomas Mann, 1875～1955）の小説と出会ったのも信州の旧制松本高校での寮生活の時代であった。しかし、それまでの北杜夫の幼年期、少年期の思い出は、昆虫ひとつに被い包まれていたと言っても過言ではない。

北杜夫のドイツと文学との関わりを強いて言及するとすれば、『グリム童話集』との出会いであろう。北杜夫は初めて文庫本の『グリム童話集』を読んだときのことを、自伝的随想『どくとるマンボウ追想記』（1976）の中で次のように語っている。

私は岩波文庫というものを生来苦手と思っていた。それには絵もないしいかにもむずかしげであったからだ。しかしそのときはいかにも退屈だったから、ついにその一冊を手にとってみると、「グリム童話集」とあった。

童話なら大丈夫だろうと読みだすと、予想以上に興味ぶかかった。私はその家で、たしか四冊になっていた「グリム童話集」を全部読んだ。今から思うと、先の「アラビアンナイト」と共に、かすかな

1 北杜夫『人間とマンボウ』（全集-15）、76ページ。

文学への開眼だったかもしれない²。

斎藤宗吉少年の小学校五年の夏の記憶である。「その家」とは、母斎藤輝子（1875～1995）が、夏の間だけ借りていた小さな一軒家のことである。当時、輝子は夫斎藤茂吉（1882～1953）と別居中であった。そして夏を葉山や逗子の海岸で過ごしていた母のところへ、夏休みの前半にだけ、子供たちに遊びに行くことが許されていたのである³。しかし北杜夫のこのグリム童話による文学体験は、そのままドイツへの関心に結びつくものではない。そしてこの読書体験も、その後の昆虫への興味に覆い隠されてしまうことになる。

北杜夫の父斎藤茂吉はアララギ派の著名な歌人であり、精神科医として、養父、妻輝子の父から引き継いだ青山脳病院を経営していた。北杜夫が幼年期そして少年期に夢中になった昆虫採集、昆虫への関心は、信州の旧制松本高校での自然とのふれあいの中でさらに育まれる。その心の中に湧き出てきたフェアブルのような動物学者になりたいという、進学に際しての希望は、父によってうち砕かれてしまう⁴。茂吉は歌人として文学の世界に生きると同時に、精神科医として、また病院の経営者として現実の世界を生きており、兄茂太（1916～）も同じ精神科の医者であった。この環境の中での北杜夫の志望は、医者としての父にとって、非現実的に感じられたのは当然と言えるであろう。北杜夫が父の意志に沿って東北大学医学部に進んだのは、1948年の春のことである。

しかし、その一方で少年期に読んだ『グリム童話集』や『アラビアンナイト』によって「かすかな文学への開眼」を果たしていた北杜夫は、松本高校時代に、昆虫とは関わりのないもう一つの体験をする。つまりドイツの小説家トーマス・マンの存在を知ったのである。北杜夫とドイツ、そしてトーマス・マンとの結びつきは、仙台での医学生時代にさ

2 北杜夫『どくとるマンボウ追想記』、中央公論社、1976年、62ページ。全集未収録。以下『追想記』と略記。

3 『追想記』、59ページ。

4 北杜夫『どくとるマンボウ青春記』（全集-13）、87ページ参照。以下『青春記』と略記。

らに具体化していく⁵。

北杜夫はその自伝とも言える『どくとるマンボウ青春記』（1968）の最後は、父茂吉の死で締めくくられている。医学生としての仙台時代を「インターンが終わりに近づき、医師国家試験を前にして相変わらず恥多き怠惰な日を送っていた」⁶ときに、父の危篤を知らせる電報を受け取る。「しかも手ひどい宿酔のなかで」⁷と告白している。そして夜汽車で東京へ戻るとき、「カバンの中に、ほとんど完成しかけた」⁸と言う最初の長編小説『幽霊 ー或る幼年と青春の物語ー』（1954）の原稿を入れていたと、北杜夫はその青春の記録を締め括っている。1953年2月25日、父茂吉は死亡する。

それからほぼ20年後、北杜夫が父茂吉から隠れるようにして書き続けていた『幽霊』、自らの幼年期と青春期を綴ったこの作品の続編が書き上げられる。副題によって『幽霊』の続編であることが示されている長編小説、『木精 ー或る青年期と追想の物語ー』（1975）がそれである。

本稿ではこの二つの作品、『幽霊』と『木精』を考察するために、その手がかりとして、北杜夫の文学の原点の一つとしての父茂吉、ドイツ、そしてトーマス・マンとの関わりについて考察してみたい。

II 『幽霊』の中のドイツ

長編小説『幽霊』の執筆時期は、1950年11月、短編小説『少年』（1950）を擱筆してからのことである。北杜夫の1950年11月7日の日記には、その「二、三日前から『幽霊』という短編を書き出した」⁹と記されている。そして短篇小説として書き始め、前年から雑誌「文芸首都」に連載し、長編小説となった『幽霊』を、1954年5月に完結させている。中央公論社から出された単行本『少年』の「あとがき」には「昭和

5 『青春記』、110ページ～113ページ参照。

6 『青春記』、169ページ。

7 『青春記』、169ページ。

8 『青春記』、170ページ。

9 北杜夫『或る青春の日記』、中央公論社、1988年、378ページ。以下『日記』と略記。

四十五年晩夏」と日付され、20年前の思い出が次のように綴られている。

その昭和二十五年という年は、同人誌であれ活字になったという喜びと希望があったゆえか、かなりの原稿を書いている。書いた順番からいうと、『友情』『狂詩』『牧神の午後』『パンドラの匣』『少年』の順番である。なお、最初の長編『幽霊』も、この年に書きだされた¹⁰。

その一方で北杜夫は、「作品が書けるのに、書くことを許されぬ。何かがネタマシくてならぬ。」¹¹と、同じ年、1950年1月28日の日記に記している。医者になることを息子に強いた父茂吉の束縛が、この言葉から読みとることが出来ると言えるだろう。しかし北杜夫は父に隠れるようにして書き続けていたのである。すでに詩を作っていることを父に知られてはいたが¹²。仙台での生活は父茂吉の死後も数ヶ月続き、1953年5月になって東京に戻る。慶應義塾大学医学部神経科教室に助手として採用された北杜夫は、新たな生活に入ることになる。『幽霊』の第一回を「文芸首都」に発表したのも同じ月のことであった。それから完結までに、さらに1年間の月日を要することになる。そして完結の年の秋、母輝子の経済的援助を得て『幽霊』を自費出版する。750部刷られた『幽霊』は書店では10冊程度が売れただけで、ほとんどが返品されてしまうのである。

その『幽霊』は、次の様に書き始められている。

人はなぜ追憶を語るのだろうか。

どの民族にも神話があるように、どの個人にも心の神話があるものだ。その神話は次第にうすれ、やがて時間の深みのなかに姿を失

10 北杜夫『少年』、中央公論社、1970年、99ページ～100ページ。

11 『日記』、331ページ。

12 『青春記』、136ページ参照。なお1949年5月22日に記した日記にも、同様の記述がある。『日記』、241ページ参照。

うように見える¹³。

当時の北杜夫が愛読していたトーマス・マンの作品の中の一つ、長編小説『ヨゼフとその兄弟たち』(*Joseph und seine Brüder*, 1933)の「序章」の印象的な冒頭の言葉から、この文章を起草したことは間違いないだろう。トーマス・マンが「過去という泉は深い。その底はほとんど計り知られぬと言ってよかろう」¹⁴と語り始めるヨゼフの物語の舞台が、民族の神話の時代にまで遡るのに対し、北杜夫の神話は、個人の心の中での過去への遡及で止まる。

『幽霊』の第一章では、主人公の幼年期の体験が語られており、それは北杜夫自身の幼年期の体験への追憶に重なっている。トーマス・マンの『ヨゼフとその兄弟たち』を思い起こさせる冒頭部に続き、主人公「ぼく」は幼い頃の記憶に残る母の部屋を描写している¹⁵。『どくとるマンボウ追想記』に描かれた母輝子の和部屋は、絨毯を敷き詰め洋室風にしつらえており、そこには化粧台が置かれ、その大きな引き出しの中には様々な装身具が納められている¹⁶。この母輝子の部屋には無いゴブラン織りのタペストリーや衣裳箆笥が、「ぼく」の母の部屋には置かれている。続いて主人公「ぼく」は、その父親を次のように描写している。

いま考えてみれば、父はひとりの秀でたディレクタントであったようだ。生まれつき創造ということの尊厳と陋劣とを知りつくして、もうひとつの凡庸な平明な世界への憧憬が、どの方面へも彼を深入りさせなかったのかも知れない。とにかく彼がつめたく酔いながらあとに遺したものは、紀行と随筆の本が数冊と、ちいさな青

13 北杜夫『幽霊』(全集-3)、6ページ。以下『幽霊』と略記。

14 Thomas Mann, JOSEPH UND SEINE BRÜDER. THOMAS MANN Gesammelte Werke in dreizehn Bänden. Frankfurt am Main, S. Fischer Verlag, 1974, BAND VI S. 9. なお訳は新潮社による「トーマス・マン全集」全12巻から引用させてもらった。

15 『幽霊』、6ページ～8ページ参照。

16 『追想記』、5ページ参照。

表紙の詩集が一冊だけである¹⁷。

母の部屋はトーマス・マンの短篇小説『トリスタン』(*Tristan*, 1903)の主人公、文士デートレフ・シュピネルの唯一の著書の舞台を思い起こさせる¹⁸。「ほく」の父親はシュピネルその人であると言って、過言ではあるまい。しかし「ほく」の記憶の中の母は、北杜夫の母輝子に通ずるものがあるのに対し、父は、「ほく」に威圧的に迫ってくる蔵書であふれた本棚の所有者であることを除けば、北杜夫自身の父、茂吉とは異なると言える。この様に『幽霊』の中には、トーマス・マンの作品を思い起こさせる場面が見られるが、直接、北杜夫とドイツを結びつけるものではない。トーマス・マンがドイツ人であるということが、北杜夫のドイツへの関心の架け橋になっているに過ぎない。

『幽霊』の最期の章、第四章では、北ドイツの町リュベック、そしてブッデンブロークの家、さらにローテンプルク、テルツ、ハンブルクと具体的な地名¹⁹が登場するが、具体的な描写には至っていない。主人公の「ほく」が、両親がドイツに滞在したときの知人であるという女性から、その頃の写真と共に語られる思い出話を聞かせてもらうという形をとっている。北杜夫のドイツ、そして『ブッデンブローク家の人々』(*Buddenbrooks Verfall einer Familie*, 1901)や『トーニオ・クレーゲル』(*Tonio Kröger*, 1903)の舞台であるリュベックへの想いは募るものの、現実の風景を目にすることは、まだ叶えられない時代でもあったと言えよう。

『幽霊』の「ほく」の両親と同じように、北杜夫の両親茂吉と妻輝子はドイツを訪れている。茂吉は、留学のために1921年10月末に日本を立ちヨーロッパへ向かう。1922年1月からウィーン大学で、そして翌年1923年7月から帰国するまでの1年3ヶ月間、ミュンヘン大学で研究生活を続ける。留学中、茂吉は研究の合間に、時々旅行もしていた。そ

17 『幽霊』、8ページ。

18 Thomas Mann, TRISTAN. THOMAS MANN Gesammelte Werke in dreizehn Bänden. BAND VIII S. 224.

19 『幽霊』、124ページ～125ページ参照。

して帰国直前の1924年7月には、妻輝子とパリで落ち合い、二人でさらにベルギー、オランダ、ドイツ、スイス、イタリアを旅して巡り、帰国の途につくことになる。茂吉は帰国後、ヨーロッパ滞在中の記憶を数々の随筆のなかに残している²⁰。茂吉はその随筆の一つ『羅馬』の中で、ヴァチカンを訪れたときのエピソードを書き残している。茂吉はミケランジェロの天井壁画を見るために、床に新聞紙を敷いて仰向けになって鑑賞したのである²¹。この茂吉の滑稽な姿は、ドイツ滞在中の知人の女性から聞かされた「ぼく」の父の姿、美術館で作品を前にしてレイン・コートを床に敷いて座り込む姿として描かれている²²。『幽霊』を執筆していた北杜夫にとって父茂吉の随筆は、ヨーロッパそしてドイツについて知るために、最も身近で信頼できる唯一の参考資料であったと言えるのではないだろうか。

東北大学医学部を卒業し、『幽霊』の執筆を続けていた北杜夫は、1952年7月16日付けの日記に「なんだか、ひたすら外遊してみたくなった。やはり行きたいのはドイツである」²³と、記している。北杜夫のドイツに対する憧れと、切ない想いを知ることができる。そして北杜夫が初めてドイツの地をその自らの足で踏みしめるのは、それから7年後のこととなる。

北杜夫の『どくとるマンボウ航海記』（1960）は、「私はなぜ船に乗ったか」という章で始まる。そこには北杜夫がドイツに行くために受けた文部省の留学試験に、書類選考の段階で落とされ失敗したこと、そしてヨーロッパに立ち寄る予定の漁業調査船が船医を募集しているという、突然舞い込んできた情報を耳にして、それに慌ただしく応募したことなどが、ユーモアを交えて描かれている。そして北杜夫は思いがけず、ヨーロッパへの船での旅路につくことになる。1958年11月15日のことである。そして翌年1959年2月1日の夜、北杜夫はようやくドイツに辿り着く。しかし寄港したハンブルクに上陸するのは翌朝のことになる。そ

20 『斎藤茂吉全集』、岩波書店、1973年、第五巻「随筆 一」に収録されている。

21 『斎藤茂吉全集』、第五巻、407ページ～409ページ参照。

22 『幽霊』、125ページ参照。

23 『日記』、412ページ。

の朝を北杜夫は次のように描いている。

こまかい霧が、というより氷の微細な小片があたり一面に舞っていて、空を見あげると、そういう霧の向こうにかすかに白い太陽が浮かんでいる。実に乏しい光で、霧が濃くなると一瞬にしてその輪郭は一面の白い世界へ溶け込んでしまい、やがてまたほんやりと現れる²⁴。

北杜夫はこの朝の光景を見て、『トーニオ・クレーゲル』の冒頭部の文を思い起こしている。そしてハンブルクからほど遠くないリューベックを、北杜夫は日帰りで訪れ、念願であったトーマス・マンの生まれた町をようやくその目で見る事ができたのである。しかし期待とは裏腹に、ブッデンブロークの家はリューベックの名所でもなく、「それほど由緒ある建物とも窺えず」²⁵、北杜夫は「舗道に佇みながら、なんとなくわびしい気持ち」²⁶になる。こうして北杜夫の初めてのリューベック訪問は呆気なく終わってしまう。そして岐路に就いた調査船は、無事4月末に日本に戻ってくる。

北杜夫は、船医として乗船した海洋調査船照洋丸での航海の記録を、ユーモアを盛り込んだ随筆にした。その随筆『どくとるマンボウ航海記』を帰国の年の師走に脱稿し、翌年1960年3月に刊行する。母輝子にお金をたかってまでして自費出版した小説『幽霊』のときは異なり、北杜夫の初めてのベストセラーになるのである。そして1961年1月には形だけになっていた慶応大学医学部の助手を辞任し、精神科医としての仕事は兄茂太の経営する斎藤精神科医院の診察だけに限り、文筆活動に入る。ひたすら小説や、『どくとるマンボウ航海記』に続く「どくとるマンボウ」シリーズ等を書くことに専念することになる。しかし一方では経済的余裕ができたものの、ドイツからは再び遠ざかってしまう。その後、

24 北杜夫『どくとるマンボウ航海記』（全集-11）、67ページ。以下『航海記』と略記。

25 『航海記』、71ページ。

26 『航海記』、71ページ。

北杜夫がドイツを訪れるのは、10年ほど先のことになってしまう。

Ⅲ ドイツ再訪

北杜夫は1969年7月31日、旧友辻邦生とパリで再度落ち合う。かつて照洋丸の船医としてヨーロッパを訪れた際も、北杜夫はパリで留学中の辻邦生と会っている。二人は松本高校時代から、トーマス・マンを共有する友の間柄であった。

8月1日、二人はスイスに向かい、チューリヒで一泊した後、翌2日キュスナハトを訪れる。北杜夫にとって念願であったトーマス・マンの墓に詣でるためであった。トーマス・マンに造詣の深い二人であったはずだが、北杜夫と辻邦生は失念していたのかもしれない。キュスナハトは、トーマス・マンが1933年の秋から最期の亡命の地となったアメリカに渡る1938年9月初旬まで、その仮の居を定めた村である。そして第二次世界大戦後、ドイツに戻ることなく再び定住の地として選んだのもスイスであり、チューリヒの郊外の地であった。しかしトーマス・マンが「私のこれが最期の住所、ということにしたいものです。」²⁷とヘルマン・ヘッセへの手紙に書き記した住所は、同じチューリヒ湖畔にはあるが、キュスナハトの対岸の村、キルヒベルクであった。

北杜夫は辻邦生と共にキュスナハトから船で対岸のキルヒベルクに渡り、その念願を叶える。『北杜夫・辻邦生対談 若き日と文学と』（1970年）の中の辻邦生の言葉を借りれば、北杜夫は教会の墓地で、「涙滂沱としてトーマス・マンの墓に跪いた」²⁸という。二人はトーマス・マンの旧居、その終焉の地を訪れた後、チューリヒに戻り、閉館時間寸前であったトーマス・マンの記念館に駆け込む。初めてリュベックを訪れた時と同様に、慌ただしい一日であったようである。北杜夫自身も『マンボウぼうえんきょう』のなかで、墓前で自らの様子を「マンボウ」流の

27 Hermann Hesse – Thomas Mann Briefwechsel. Anni Carlsson (Hrsg.), Frankfurt/Main: Suhrkamp Verlag S. Fischer Verlag, S. 185.

28 北杜夫・辻邦生『北杜夫・辻邦生対談 若き日と文学と』、中央公論社、1970年、57ページ。

ユーモアをまじえて、語っている²⁹。しかし、このトーマス・マンの墓詣は、『幽霊』に続く新たな作品のための取材ではなかった。しかしトーマス・マンの誕生の地と終焉の地を訪れた北杜夫にとって、その心の中にあったドイツ、あるいはトーマス・マンに対する憧れと切ない想いを十分叶えることができたのではないだろうか。それはまた、『幽霊』の主人公の「ぼく」の見た夢を実現するものでもあったと言える。

1972年10月、北杜夫は再びパリで辻邦生と落ち合い、チュービンゲン、ローテンブルク、リュウベック、そしてデンマークへも足を延ばし、秋のヨーロッパを取材してまわる。前回のように朝日新聞の依頼でアポロ11号を取材するためにアメリカへ派遣され、その帰路に立ち寄ったヨーロッパ、駆け足で済ませたトーマス・マンの墓参りではなかった。明らかに『木精』を意識してのヨーロッパの旅であったと言える。そしてさらに翌年1973年の6月には、妻喜美子と共にドイツ、オランダを旅行する。この時には、父茂吉が旅し『ドナウ源流行』に記した町ドナウエッシンゲンや、チュービンゲンも再度訪れている。この二度のドイツを主とした旅行が、北杜夫に『幽霊』の続編となる『木精』の執筆を促したと言える。1974年1月から『木精』は雑誌『新潮』に連載されはじめ、翌1975年2月に完結し、同じ年の6月一冊に纏められて、長篇小説『木精』は刊行されるのである。

IV 『木精』の中のチュービンゲン

『幽霊』の副題である「一或る幼年と青春の物語一」に続き、『木精』には「一或る青年期と追想の物語一」という副題が添えられている。こうして主人公「ぼく」の幼年期の微かな記憶に始まった物語は、漸くその青年期まで達することになる。『幽霊』の主人公「ぼく」は成人し、『木精』の主人公「ぼく」となり、医者としてチュービンゲンの精神研究所に留学し、既に二年が経過したところからこの物語は始まる。追憶は、『幽霊』とチュービンゲンで暮らす「ぼく」との時間的空白を埋めるように、ドイツへ発つ前のノツ子、人妻である倫子との関係について語られている。留学中の「ぼく」の時間と追憶の中の時間、二つの時間が交差

29 北杜夫『マンボウぼうえんきょう』（全集-15）、180ページ。

しつづ物語は展開していくのである。

主人公の「ぼく」の留学先にチュービンゲンを選び、その取材のために二度訪れたことについて、北杜夫は次のように述べている。

チュービンゲン大学には世界中から学生が集まる。私の医局時代にも、かなりの医者が留学した名門である。チュービンゲンは学生の町で、「ヒューベリオン」を書いた分裂症者ヘルダーリンの幽閉されていた塔が名高い。またヘッセがここの書店の店員をしていて、そのことを記したプレートがつけられている。私は「幽霊」の第二部「木霊」の主人公をこの大学に留学させるため二度取材に行った³⁰。

北杜夫は父茂吉がチュービンゲンで作った歌、

おもほえず月がのぼりて Necker の川波てらすあかくまどかに³¹

を引用し、さらにチュービンゲンの町、ネッカー川について、さらに次のように述べている。

ネッカー川は大河ではないが、砂洲が横手に拡がっていて、情緒豊かな流れである。この歌の「おもほえずあかくまどかに」は年齢から言って甘いかも知れないが、関東大震災の報にも会い、現在と違って種々の面で苦勞の多かった留学もついに終わったという感慨を抱いて旅をした茂吉の心情を思うと、私はむしろ共感したくなる。初句の「おもほえず月がのぼりて」は何とも言えない³²。

北杜夫は、チュービンゲン大学を『木精』の主人公「ぼく」の留学先と

30 北杜夫『壮年茂吉』、岩波書店、1993年、135ページ。以下『壮年茂吉』と略記。

31 『壮年茂吉』、134ページ。『斎藤茂吉全集』、第一巻「歌集 一」の「遍歴」のなかに収められている。624ページ参照。

32 『壮年茂吉』、135ページ。

したのは、慶応大学での医局時代に留学先になっていて、その町の名前がただ浮かんで来た、と述べているが、しかしそれだけでなく、父茂吉が、様々な苦勞をしての留學生活を終えようとしたときに訪れた町であったことも、大きな要因であったと考えられる。また旅行の経験だけで、ドイツ留學の機会が無かった北杜夫にとって、留學中の父茂吉を「ほく」のモデルにすることは当然のことであったと言えるであろう。

茂吉の第五歌集である『遍歴』は、茂吉が1923年7月19日に、ウィーンを出てミュンヘンに到着した日から、1924年1月始めに帰国するまでの歌を収録している。ミュンヘンでの留學生活は、日本を発つてすでに1年9ヶ月が過ぎて始まる。茂吉が毎夜床蝨に悩まされながら探した下宿先は、ミュンヘンに到着した後、一ヶ月を過ぎてようやく決まるのである。

北杜夫は、初めての長篇小説である『楡家の人々』(1964)の中で、楡脳病院の二代目である徹吉のドイツ留學中の描写について、「ただ徹吉のドイツ留學の部分は、茂吉の隨筆がなかったなら、とても書けなかった」³³と述べている。『幽霊』の場合と同様、北杜夫はまだドイツをその目で見ていないのである。徹吉のミュンヘンの下宿先の「日本婆さん」³⁴は、茂吉のようやく見つけた下宿先の女主人、隨筆『日本媼』³⁵に描かれている Marie Hillenbrand がそのモデルとなっている。下宿して間もなく、茂吉は彼女の飼っていたカナリアを次のような歌に詠んでいる。

Hillenbrand 媼の飼えるカナリアは十五歳になりて吾に親しも³⁶

北杜夫は、茂吉の「握手拒否事件」³⁷と、それとは対照的な心を和ませる年老いたカナリアを、徹吉の体験として物語に取り込み描いているのである³⁸。北杜夫の言うように、徹吉のモデルとしての茂吉をここに読み

33 『壮年茂吉』、128ページ。

34 北杜夫『楡家の人々』(全集-4)、135ページ参照。

35 『斎藤茂吉全集』、第五卷、778ページ～783ページ参照。

36 『斎藤茂吉全集』、第一卷「歌集 一」、『遍歴』、567ページ。

37 『壮年茂吉』、119ページ～120ページ参照。

38 『楡家の人々』(全集-4)、132ページ～135ページ参照。

とることが出来るが、『木精』の主人公である「ほく」の父のモデルとしての茂吉のみならず、「ほく」の姿も茂吉のなかに見ることが出来る。

8月末、ミュンヘンでの下宿先が決まったばかりの茂吉のもとに、実父守谷伝右衛門の死の報せが届く。さらに、この悲しい報せに続き、9月3日の夕刊の記事で、茂吉は東京を襲った関東大震災を知る。家族の安否を知る術もなく、不安に充たされたまま、茂吉のミュンヘンでの下宿生活が始まったのである。茂吉は、日本から遠く離れたドイツにその身を置く焦燥の感を込めた歌を作っている。

今日ゆ後いかにか爲おもへどもおもひ定まらぬ現身われは³⁹

さらに数日後、次のような歌も作っている。

友とともに飯に生卵かけて食ひそののち清き川原に黙す⁴⁰

イザールの川原で友人と共に立ち、何も語らず黙している茂吉の心の内を語る歌と言えるのではないだろうか。生卵をご飯にかけて食べる、という意外な行動は、『木精』の第一章の中の主人公の「ほく」にも見ることが出来る。北杜夫はこの頃の茂吉の不安定な精神状況を、「ほく」の中に移し植えているのである。

「ほく」は、家主であるヘルガおばさんの家族の食事が終わり片づけられた下宿の台所で、独り米を炊き、生イカを煮付け、出来上がった飯と生卵を二箇を四階の自室に持ってあがる。

ほくは日本からわざわざ持ってきた茶碗にそれをよそり、生卵と醤油をかけ、かきまぜて夢中で呑みこんだ。三杯食べ、四杯を食べ

39 『斎藤茂吉全集』、第一巻「歌集 一」、「遍歴」、570ページ。

40 『斎藤茂吉全集』、第一巻「歌集 一」、「遍歴」、570ページ。

妻禰子とパリで再会した茂吉は、この時のことが忘れられなかったのか、帰国の途上で「あたたかき飯に生卵かけたるを呑みこみし日は果敢なかりしか」という、卵ご飯の歌を再度作っている。

た。イカも醤油味だけで辛かったが、ろくに咀嚼もせず喉から呑みこんだ。そうすることが、心の空虚さを埋めてくれるかのように⁴¹。

「ほく」もまた、生卵をご飯にかけ、虚しい食事をする。茂吉の不安と焦燥のなかでの生卵をかけたご飯は、留学生がたいてい一度は罹るといふ憂鬱症にとりつかれている「ほく」の、「終戦後の食糧難時代そっくりだ」⁴²という貧しい食卓に置かれるのである。無視してもいいような些細な日常の描写ではあるが、「ほく」の「心の空虚さを埋める」という食事の場面から、「ほく」の侘びしげな姿のなかに、留学中の茂吉を見ることができないのではないだろうか。

ドイツの新聞で報じられる関東大震災記事の中の悲惨さを、茂吉は「死者五十萬餘と註せる」と歌の中に詠んでいる。9月13日になって東京の家族の無事を伝える電報が、間接的なものではあったが茂吉のもとに届く。この報せを受け取った茂吉は、次のような歌を残している。

體ぢゆうが空になりしごと樂にして途中靴墨とマッチとを買ふ⁴³

「體ぢゆうが空になりしごと」という初句は、その不安、焦燥から解き放たれた茂吉の心中を物語っていると見えよう。茂吉はさらに数日後、友と共に黙っていたというイザール川の川原で、ドイツ人の子供の様子を描いて、後に北杜夫が『木精』の冒頭部に引用することになる次の歌を作っている。

はるかなる國とおもふに狭間には木精おこしてゐ童子あり⁴⁴

一応の安心を得たとは言え、ドイツ、しかもヴィーンから移って来たばかりで、まだ馴れないミュンヘンにいる茂吉の精神的不安は、被災した

41 北杜夫『木精』（全集-3）、141ページ。以下『木精』と略記。

42 『木精』（全集-3）、141ページ。

43 『斎藤茂吉全集』、第一巻「歌集 一」、「遍歴」、570ページ。

44 『斎藤茂吉全集』、第一巻「歌集 一」、「遍歴」、570ページ。

「はるかなる國」という、遠く離れた故郷を想う歌に表されていると思われる。物語の終わりをこの歌に託しているとは言え、『木精』の主人公の「ほく」には、茂吉がようやく得た安堵、心の余裕の芽生えはまだ無い。

「ほく」は「チュービンゲンのくすんだ屋根裏部屋に坐り、また別種の憂鬱病にとりつかれている」⁴⁵と言う。「もともと医者になろうとする気が稀薄だった」⁴⁶「ほく」は、伯父に強くすすめられ医者になったものの、高校から大学にかけての時期に文学に心を奪われてしまっている。そして「意外にふかくほくの内部に根をおろした」⁴⁷というリューベックの作家はトーマス・マンである。「ほく」の「別種の憂鬱病」の原因には、医学と文学に加え、人妻である倫子の存在がある。北杜夫は、「ほく」と倫子との過去の回想を『木精』のもう一つの流れとして物語っている。「ほく」はドイツにきた理由を次のように語る。

ほくがドイツにきたのは、学問をするためもちろんだが、人には告げられぬが、一人の女性と思いきって別れるため、ということも大きな要因でもあった⁴⁸。

茂吉の「はるかなる國」にいる「ほく」は、日本にいる倫子と別れるためには「外国という当時にはおよそ遠い距離」⁴⁹を必要としていたのである。

V 『ドナウ源流行』

『幽霊』の主人公の「ほく」の父の思い出を、『木精』の主人公の「ほく」もまた繰り返し語る。

ほくが幼いとき亡くなった父、生れつき創造ということの尊厳も

45 『木精』、148ページ。

46 『木精』、148ページ。

47 『木精』、149ページ。

48 『木精』、144ページ。

49 『木精』、144ページ。

陋劣も知りつくして、いわば秀でたディレクターの一人であった父があとに遺したものは、紀行と随筆の本が数冊と、小さな青表紙の詩集が一冊だけである⁵⁰。

そして『木精』の第二章では、「ほく」は父の残した紀行文『欧州紀行』の中の「ドナウ源流を尋ねて」という文章に心を惹かれ、その文章を手引きにして、自らその足跡を辿る旅に出る。「ほく」はチュービンゲンからほど遠くないドナウエシンゲンへ向かうのである。

北杜夫にとって父茂吉が留学中の体験を綴った随筆が、ドイツ滞在中の「ほく」の行動を描くための素材になっていたことは、先に述べたとおりである。このドナウ川の源流への旅も、父茂吉の随筆『ドナウ源流行』⁵¹がその根底となっている。そして「ほく」の父の紀行文は、茂吉の文章を部分的に引用して記されている。そこでは、茂吉の出発点とは異なり、ドナウ川が流れるヴィーンが出发点となっている。茂吉もヴィーン滞在中にすでにその源流への関心を抱いていたことは、『ドナウ源流行』の冒頭部で述べられている。茂吉は1924年4月18日の朝、ミュンヘンを発ち、ドナウ川の源へと向かったのである。「ほく」の父がドナウの源泉の町に着いたときのことを、その紀行文から物語の中へ次のように引用している。

「汽車は夜になって遂にドナウエッシンゲン駅に着いた。余は月光を浴びながら汽車から降りた。シュツェンといふ旅館を尋ねあて、部屋をきめ、冷食を頼んでから、ドナウはどの辺を流れてゐるか尋ねると、帳場の若者はかう答えた。流れはすぐ近くにある。これはブリーガッハ川である。この流れをしばらく下るとプレーグ川がこれに合する。ドナウはそこから始まるといふのであつた」⁵²

茂吉の随筆では次のように述べられている。

50 『木精』、168ページ。

51 『斎藤茂吉全集』、第五巻、260ページ～296ページ参照。

52 『木精』、168ページ。

汽車は、十時三十分に遂に Donaueschingen 驛に著いた。僕は月光浴びて汽車から降りた⁵³。

さらにホテルへと向かう。

手揚げカバンを持って、僕は Schütze といふ旅館を尋ねて行った。…僕は部屋を極め、それから料理を二品ばかりと麥酒とを部屋に用意しておくやうに命じて外へ出た。…ドナウがどの邊を流れてゐるか尋ねると、帳場の若者はかう答えた。流れは直ぐ近くにある。これは Brigach 川である。この流れをしばらく下ると Brege 川がこれに合する。ドナウはそこから始まるといふのであつた⁵⁴。

茂吉の文章の中略部分を除けば、「ぼく」の父の文章は、ほぼそのままの引用であることが判る。ホテルの名が「シュッツェン」と Schütze の違いがあるが、実在するホテルの名は「シュッツェン」であることは、北杜夫も、その兄齋藤茂太も、それぞれがドナウエッシンゲンを訪ねた際に確認している⁵⁵。そして「ぼく」もまた、同じホテルに宿泊する。しかし「ぼく」が訪れたドナウエッシンゲンは、6月の終わりの頃であり、夜月光を浴びての到着ではなく、強い日差しのもとで額の汗を拭いながらホテルに向かうことになる⁵⁶。

「ぼく」はホテル・シュッツェンの食堂でビールを飲みながら、父のことを想う。

そんな昔に父が泊まったホテルの椅子にいま自分が腰をおろしているのだと思うと、一種もの寂しいような醜悶感がぼくを包みこんだ。それは、子供のころ一度感じたことのある、父とぼくとは同じもの、少なくとも同類だという意識からもたらされるものかもしれ

53 『齋藤茂吉全集』、第五卷、276ページ。

54 『齋藤茂吉全集』、第五卷、276ページ～268ページ。

55 齋藤茂太・北杜夫『この父にして』、毎日新聞社、1976年、38ページ。

56 『木精』、169ページ。

なかった⁵⁷。

「ほく」はフルステンベルヒ公の居城にあるというドナウ源泉を見に行く。北杜夫も父茂吉もこの源泉を訪れている。しかし、「ほく」の父はこの源泉のことを書き記してはいない。「この泉のことは父の文章には出てこない。それがなぜとなく寂しいような気もした」⁵⁸と、「ほく」は思う。北杜夫とその自画像であるとも言える「ほく」の父親たちは、このドナウ川の源流を辿る旅で、『木精』の物語の中から直接的な姿を消すのである。

VI 「父」からトーマス・マンへ

チュービンゲンの下宿の屋根裏部屋で、憂鬱病に取り憑かれた「ほく」は、日本での過去を回想して次のように記している。

思えば、高校時代から大学時代にかけて繰返し嘆賞したあのリュウベックの作家の書物は、意外にふかくほくの内部に根をおろしたようだ。そして、ほくは実際に幼稚な詩をつくったり小説めいたものを書きだしたのだった。ちょうどトニオ・クレゲル少年がおずおずと書いたのであろう稚拙で感傷的なそれを⁵⁹。

しかし第三章の冒頭部では、「以前は比較的気分にまかせた書き方をしたものだが、リュウベックの作家の作品をまた読み返し、今度こそ一語一語、丹念に言葉を選びぬくことから出発した」⁶⁰と、内的進歩を得た自分の創作について語る。この創作に対する態度について、北杜夫はすでに『青春記』のなかで述べている⁶¹。しかし「ほく」はさらに一歩進め、「また事物から距離をとることも肝要なことであった。何ものかをいきい

57 『木精』、169ページ。

58 『木精』、170ページ。

59 『木精』、143ページ～144ページ。

60 『木精』、200ページ。

61 『青春記』、133ページ。

きと表現するためには、逆に精神は冷たく覚めていなければならぬ」と、イロニーにも言及している。そしてその文学の師となったトーマス・マンの墓参のために、「ぼく」もまたチューリッヒへ旅する。

トーマス・マンの墓を訪れる「ぼく」は、北杜夫が辻邦生と共にキルヒベルクを訪れたときと同じ行程を辿る。「涙滂沱としてトーマス・マンの墓に跪いた」⁶²と辻邦生が描写した北杜夫の墓前での姿は、「ぼく」の心の描写に見ることができる。「静かに！ このおびえたような鼓動は一体何なのだろうか？」⁶³とトーマス・マンの墓前で語り始める。『木精』では「！」と「？」の多くは、倫子との会話文の中で用いられているだけである。ここでの強調と疑問の記号は、北杜夫のトーマス・マンへの想いの重さを感じられると言ってもよいのではないだろうか。北杜夫はさらにその全てを、「さまざまな追憶が去来し、ぼくをほとんど涙ぐませた」⁶⁴という「ぼく」に託し、次のように語らせている。

いや、長年、ぼくの精神を少しずつ育んでくれた旋律が、この墓の周囲に漂っているのではなかろうか。

「ぼくはやってきました、遠い国から」

と、半ば無意識に、墓石にむかってささやいた。

「なぜなら、あなたの作品がぼくの目を覚ましてくれたからです。あなたの作品をよむたびに、ぼくは沈みこみ、或いは心をときめかせ、憂鬱になり、高揚し、なにより一切の良さ、一切の暖かさ、一切の諧謔に感嘆してきました。そして何ものかへの憧憬と郷愁に嗚咽したものです。あらゆる意味で、人間的な、ということあなたを教えてくれました。ぼくは伝統も習慣も体質も異なる一東洋人です。しかし、あなた自身がおっしゃっているではありませんか。自分一箇のことを語ることに、それが世界を語ることに通ずる者、彼こそが詩人というものだ、と」⁶⁵

62 『北杜夫・辻邦生対談 若き日と文学と』、57ページ。

63 『木精』、203ページ。

64 『木精』、203ページ。

65 『木精』、203ページ～204ページ。

トーマス・マンの墓前での独白は、「ぼく」の文学への決意であり、北杜夫の決意でもあると言える。

一度チュービンゲンに戻った「ぼく」は、友人に同行し、再びチューリッヒを経由してインスブルックへ向かう。インスブルックからチロルの山に登る登山電車の中で、「ぼく」は牧歌的な風景の中を飛ぶ白蝶にふと目がとまる。『マンボウすくらっぷ』に収録された「おやじ」というエッセイには、「将棋や昆虫と同様、文学なんてものは絶対やらせないというのが父の主義であったからである」⁶⁶という、茂吉の息子宗吉に対する気持ちが語られている。北杜夫がそうであったように、「ぼく」もまた昆虫マニアであったと言う。しかし、「一夜の空襲に伯父の家は全焼し、百箱を越えていたぼくの昆虫標本も、すべてむなしい灰になってしまった」⁶⁷と、北杜夫は自らの体験を「ぼく」に語らせている。さらに「信州へ行ってから、ぼくは採集して虫を蒐めるということをしなくなった。ただ珍しい美しい種属を眺め、心の中で嘆賞するにすぎなかった」⁶⁸と、その内的変化を告白している。そして「ドイツへきてからも同様であった」⁶⁹と。幼年時代に始まり少年時代の北杜夫の心を支配し続けていた昆虫採集への決別、過去の象徴の一つへの決別の言葉でもあると言えよう。

『トーニオ・クレーゲル』の短い第三章は、トーニオの少年時代からの離別と新たな出発の章であるのと同じように、『木精』の第三章は、北杜夫にとって、その生い立ちの中で幾重にも交錯したしがらみからの解放を目指し、青春期を過ぎてもなお北杜夫の精神の上に重く伸掛かっていた父茂吉の存在を、自らの文章で振るい落とすための章であったと言える。「ぼく」は後の章で、トーマス・マンの故郷を訪れることによって、「或る青年期と追憶の物語」を完結するのである。

本稿では、北杜夫の作品については、下記的全集をテキストとして使用した。

『北杜夫全集』、新潮社、1977年

註では（全集）と略記し、これに続く数字は巻数を表す。なお全集に収録されて

66 北杜夫『マンボウすくらっぷ』（全集-15）、283ページ。

67 『木精』、208ページ。

68 『木精』、208ページ。

69 『木精』、208ページ。

いない作品からの引用等については、註の中で逐次記す。

北杜夫の年譜等については、(全集-15)の「年譜・著作目録・著作年表」357ページ以下を参照、引用した。

Morio Kita und Deutschland

Makoto MINAMIMORI

Morio Kita, eigentlich Soukichi Saitou, ist Schriftsteller und wurde am 1. Mai 1927 in Tokyo geboren. Sein Vater, Mokichi Saitou, war bekannter Dichter der Araragi-Schule und Psychiater. Von Kindheit an interessierte sich Kita für Insekten und träumte davon, Insektenkunde zu studieren und Entomologe wie Fabre zu werden. Aber dieser Traum erfüllte sich nicht. Sein Vater erwartete, dass sein Sohn auch Arzt wird, wie bereits der ältere Sohn, Shieta Saito. Kitas Traum war zu Ende, als er in die Uni eintrat. Mit 21 Jahren entsprach er den Erwartungen seines Vaters und nahm an der Tohoku Universität in Sendai das Medizin-Studium auf.

In der Kindheit las Kita Grimms Märchen, die damals im Iwanami Verlag als Taschenbuch erschienen. Es war das erste Mal, dass er Bücher ohne Bilder las. Trotz Verständnisnot las er alle Bände und interessierte sich seither im Stillen für Literatur.

Seit dem 18. Lebensjahr besuchte er die Matsumoto-Oberschule in Nagano. Damals wohnte er in einem Schülerheim. Das Leben in Matsumoto war ganz anders, als er es von Tokyo kannte. Dort erlebte er eine neue Welt. Er begann, viele Bücher zu lesen, z.B. die Werke von Goethe, Kant, Nietzsche u.s.w., und auch Deutsch zu lernen. Es ist bemerkenswert, dass er bereits in dieser Zeit Novellen von Thomas Mann las und poetische Texte zu schreiben begann. Aber sein Vater verbot ihm, literarische Werke zu schreiben. Doch heimlich las er schöne Literatur und schrieb auch weiterhin Novellen und Gedichte. Im Jahr 1953 starb sein Vater. Damals schrieb er seinen ersten Roman

„Gespenster“ (『幽霊』).

Im ersten Kapitel dieses Romans erzählte Kita über die Kindheit des Helden. Der Held des Romans ist „ich“ (『ぼく』). Anstelle von „Kita“ erzählt er die Geschichte seiner Kindheit und Jugend. Zuerst stellt er das Zimmer seiner Mutter dar. Ihr Zimmer war eigentlich im japanischen Stil eingerichtet, doch gab es viele europäische Möbel. Das Zimmer wirkte europäisch. Die Atmosphäre dort rührt von dem Zimmer, das der Held der Thomas-Mann- Novelle „Tristan“, Detlev Spinell, beschreibt. Der Vater des japanischen Helden ist Schriftsteller wie Detlev Spinell, beide sind Dilletanten. In diesen Roman kann man daher Einflüsse von Thomas Manns Novellen erkennen, aber noch keine konkrete Beschreibung von Deutschland finden. Im vierten Kapitel nannte der Held lediglich die Namen von deutschen Städten, z.B. Lübeck, Rotenburg, Tetz und Hamburg. Aber er hatte diese Städte noch nicht besucht. Eine Frau, die in Deutschland seine Eltern kennengelernt hatte, erzählte ihm darüber. Kitas Vater, Mokichi, hatte von Januar 1922 bis Januar 1925 in Wien, Österreich und München Medizin studiert. Während des Aufenthalts in Wien und München hatte er viele Städte in Europa besucht. Am Ende seines Studiums war er dann mit seiner Frau Teruko durch Europa gereist.

Die Fortsetzung des ersten Romans „Gespenster“ ist der Roman „Echo“ (『木精』). Zwischen diesen Romanen schrieb Kita noch einen Roman „Nires“ (= Die Leute vom Haus Nire 『楡家の人々』). Er hatte Thomas Manns Roman „Die Buddenbrooks“ als Vorlage benutzt. In diesen drei Kita-Romanen kann man die Spuren seines Vaters Mokichi verfolgen. Tetsukiti in „Nires“ lebte und studierte als Arzt in Berlin, geistig unruhig wie Mokichi. Die Eltern in „Gespenster“ besuchten Städte in Deutschland, wie Mokichi und Teruko es taten.

Nachdem Kita den ersten Roman geschrieben hatte, fuhr er als Schiffarzt schließlich erstmalig nach Deutschland. Er besuchte die Hanse-Stadt Lübeck, wo Thomas Mann geboren war. Bei der zweiten Reise suchte er mit seinem Freund Kunio Tsuji, der auch Schriftsteller

war, das Grab von Thomas Mann in der Schweiz auf. Danach reiste er mit seiner Frau Kimiko durch Deutschland, um Stoff für den nächsten Roman „Echo“ zu sammeln.

Der Held des Romans „Echo“ ist gleichfalls ein „ich“ (「ぼく」). Er ist nun erwachsen und studiert als Arzt in Tübingen. Der Held blieb dort, nicht nur um Medizin zu studieren, sondern auch, um eine unerlaubte Liebesbeziehung zu einer Frau in Japan aufzulösen. Er lebte jeden Tag unruhig in Tübingen – unruhig wie Kitas Vater Mokichi gewesen war. Zu diesem Roman hatte er ein Essay, den Mokichi geschrieben hatte, als Vorlage benutzt, der Essay war eine Erinnerung des Vaters an den Europa-Aufenthalt. Im dritten „Echo“-Kapitel besucht der Held allein das Grab von Thomas Mann in Kirchberg. Vor dem Grab entschließt er sich zu seiner eigenen Zukunft. Er will den Weg gehen, den er gehen muss, wie Tonio Kröger dies getan hatte. Im dritten Kapitel von Thomas Manns Novelle „Tonio Kröger“ war Tonio zu seinem neuen Ziel aufgebrochen, d.h. zur Welt der Kunst: In gleicher Weise will der Held sich von seiner Vergangenheit befreien. Es war der Autor Kita selbst, der sich von seiner Vergangenheit lossagen wollte, die sein Vater Mokichi immer geistig beherrscht hatte. Der Autor Kita und sein Roman-Held gehen danach den Weg, den Tonio gegangen war, um nach Norden zu fahren.